

外国人研究者	張守祥		
Foreign Researcher	Zhang Shouxiang		
受入研究者	ロング・ダニエル	職名	教授
Research Advisor	Daniel Long	Position	Professor
受入研究科	人文科学研究科		
Graduate School/Department	Graduate School of Humanities		

<外国人研究者プロフィール/Profile>

国籍	中国
Nationality	People's Republic of China
所属機関	広東工業大学
Affiliation	Guangdong University of Technology
現在の職名	教授
Position	Professor
研究期間	2017年7月20日～8月22日
Period of Stay	July 20th, 2017 - August 22nd, 2017
専攻分野	日本語教育学
	Japanese Language Education



張守祥が2017年7月22日の旧満洲研究会で講演を行なう  
July 22, 2017 Zhang Shouxiang lectures at Manchurian studies symposium

<外国人研究者からの報告/Foreign Researcher Report>

①研究課題 / Theme of Research

研究者は、指導教員(ダニエルロング教授)の指導を受けながら、博士後期課程の研究課題を基礎に継続的に研究を行ってきた。これまでの「協和語」に関する研究は主に軍事郵便送書及び戦時中、戦後の(戦争体験者)文学作品、回想録に偏っている部分が多く、どれほど当時の言語接触の実態を反映しているか、しばしば研究上においては疑問視されることが多かった。したがって、本研究では、新史料に基づき、清の末より終戦にいたるまでの中日言語接触を一つの連続体としてとらえ、最大限に戦前、戦時中の旧満洲の都市部などで発生した中日混合言語「協和語」の新しい一側面を実証的に解明してゆきたい。考古学上においては、歴史的な事実の一つでも、史料の作成者の立場や宗教、民族、考え方などによって、記述する内容が変わってくるはずであるが、接触言語の領域においても、異なる言語の使用者は日常的な接触・交流を通し、もたらした言語変化は単一的なものではなく、複数のものであると考えられる。本研究では、複数の史料データに基づき、日本統治時代の大陸における「協和語」とその記憶の状態を明らかにする。

②研究概要 / Outline of Research

本研究用の史料は二つの部分に分けられている。中国側の史料は主に日本統治時代の経験者(中国の東北・華北地方の軍人、農民、労働者(連行された苦力)、商人、もと日本軍協力者(日偽戦犯)など)の回想録、または口述した歴史記録で、1980年以降出版されたものが多い。反面、日本側史料の年代幅はもっと広く、日清戦争より終戦時期までの数十年間にも及んでいる。作者らは当時の軍人、学生、教育者、随軍通訳などであった。その中で特に目立っているのは20世紀20年代の満洲日々新聞もあれば、戦時中の兵隊小説もある。また、その他(56冊)は日清戦争以降の日本人の中国各地での従軍・生活体験談、作文集、旅行見聞録も多く、その中から希少な接触言語の使用例を抽出し本研究のデータにする。1. 戦前・戦時中の接触言語「協和語」に関する中日話者の認識差異; 2. 中日混合会話にある二人称代名詞(「你呀」)の使用傾向; 3. 定型表現の「有」と「没有」の使用原理; 4. 同じ発語内容の表記上の民族差異; 5. 中日民間人(一般人)の「協和語」常用語彙。

③研究成果 / Results of Research

戦前・戦時中の「協和語」は言語学上の明確な言語学概念ではなく、むしろ民間レベルでさまざまな中日言語混合(話し言葉と書き言葉)状況(不規則)を概括した用語であると考えられる。その内、語彙の借用、日本語風の文法構造、「的」の拡大使用、日本語風の発音(会話)など、上記の諸要素を一つさえて、そのような話し言葉と書き言葉を「協和語」とも呼ばれる可能性がある。一方、日本人の二人称使用は正則な中国語から離脱し、対称表現以外に、言及表現にも用いられた。また、「中国人(満人)」を代替し、その使用は旧満洲にとどまらず、華北地域に及んでいた。また、一般日本人は「有」の一つだけをもって、ある動作・状態(過去、現在、未来)などを各段階を示し、中国語特有のAspect表現(動詞+了; 動詞+着; 動詞+过)の使用は完全に省略されている。反面、日本人(軍民)の「没有」の使用は必ずしも中国語の文法規則に符合しているとは限らずに、過去、現在状況の否定だけでなく、行為の禁止・意志の否定にも用いられ、中国語本来の枠組みを大幅に離脱している。接触言語(協和語)の使用者一人日本人の常用語彙数は限られており、時代的な変化は見られず、しかも、名詞類、動詞類、形容詞類など、量語形式での使用傾向は特に際立っている。

④今後の計画 / Further Research Plan

以上では、複数の新史料を研究データに、清の末(1894)より終戦に至るまでの間、日本支配(一時支配も含まれている)下に置かれた旧満洲の都市部などで発生した接触言語「中日混合会話(協和語)」に関する認識上の個人差、日本人の二人称(你)の特別指向、定形表現の「有」と「没有」の中国語文法からの離脱状況、各時期の常用語彙数と語彙内容(戦前、戦時中、戦後)を考察した。時間の都合で、どれもより深く言及できなかったことを反省しなければならないが、今現在盛んになりつつある「協和語」の研究に一石を投じるような役割が果たせば幸いに存じております。今後の課題として、首都大学東京をはじめ、より多くの日本側の大学や研究機関の研究者と連携を強め、新しい史料データを運用し、これまでの研究内容を細分化し、テーマ別に深く論じていこうと考えている。

⑤東京と海外諸都市との相互理解・友好親善関係の推進についての計画 / Further Plan of Contribution of Strength of Mutual Understanding/Friendship Between Tokyo and International cities

2012年春、博士後期課程を終え、帰国した私は昨年度6月に南国の広州にある広東工業大学に転職した。この広州は即ち「食は広州にあり」という古い都市であり、中国経済のもっとも活気に溢れてい珠江デルタ地域に位置し、日本との交流は非常に盛んである。現地に進出している日本側の企業と言えば、自動車産業(豊田、本田)を中心に、数多くの機器メーカーもある。広州は文教都市として、数十の大学を保有し、本学の日本語科を含む現地の各大学の日本語教育はこの地域の産業界(日系企業)と密接な連携関係がある。私は帰国後、所在大学の学科で提言し、首都大学東京人文科学研究科と広東工業大学外国語学院の学生同士の短期訪問、遠隔日本語教育、教育実習、大学院進学、研究協力、共同研究などの事業などを促進しようと思い、近い将来の両大学の姉妹校の関係締結に結びつけた。

< 受入研究者からの報告/Research Advisor Report >

① 研究課題 / Theme of Research

旧満洲国における言語接触の研究を張守祥が継続的に行なっている。ロングが継続的に行なっている日本語が関連する接触言語（ピジン、クレオール、混合言語など）との接点が多い。今回帰国留学生短期研究のプログラムで再び首都大学に来ていただいたことで、受け入れ教員のロングとの共同研究のみならず後輩に当たる首都大学院生の研究相談も可能になった。今回の研究テーマである「日本占領時代の中国における接触言語「協和語」の記録に関する研究—複数の史料を中心に—」では、戦前・戦時中・戦後に使われていた言語変種のデータを増やしその特徴や分類について考察するのが目的である。

② 研究概要 / Outline of Research

旧満洲国の言語接触は非常に奥が深いが、張守祥さんの博士論文やその後の刊行論文以外に研究は少ない。しかも「協和語」は一つの接触言語なのか」という根本的な質問は残っている。今回追究一つの質問はこれであった。すなわち、「協和語」と呼ばれている言語現象は中国人と日本人の両方が同じ均一化された「ピジン」を使っていたのではなく、むしろ二つの「中間言語」と呼ぶべき言語変種ではないかというのが現在の作業仮説である。一つは中国語を母語とする人の「中間言語的日本語」であり、もう一つは日本人（日本兵）が使う「中間言語的中國語」であった。張守祥は中国に戻った後に一人前の研究者として独自の研究を繰り広げているが、ロングが世界中の他の接触言語と比較した上たどり着いたこの作業仮説を、「研究指導」として張守祥に説明するのは今回の来日目的の一つであった。

③ 研究成果 / Results of Research

今回の一ヶ月の滞在中に次の研究成果を生挙げた。まず、帰国留学生が来日して間もない7月22日に張守祥を中心とする公開研究会を中心とする研究会を企画した。そこに様々な関連分野の研究者の成果や見解を聞いた上で、全員で議論し受け入れ研究者（ロング）と帰国留学生が研究を開始する前に一緒に研究問題点を整理するのが目的であった。これには首都大学の久保明男教授、東京外国大学名誉教授の井上史雄、大阪大学名誉教授の真田信治をはじめ、一橋大学の旧満洲国研究会のメンバーが参加して大変有意義な研究会となった。その後、張守祥が首都大学現役大学院生である甲賀真広とともに多数の関連文献を発掘した。こうした一次資料を見つけるには気が遠くなるような地道な作業だが、二人が当時の雑誌記事や短編小説、戦後に書かれた回想録などを見つけた。その中に含まれている「協和語」や関連記述を拾い分析する資料として整えた。

④ 今後の計画 / Further Research Plan

上記の研究成果で概説したように、今回新たな資料が少しずつ発見されている。今後の作業は4段階に分かれる。まず1つ目は、はこうした出版物の背景的要因を一つずつ改名する。すなわち、筆者の正体や属性、出版に到った経歴、データとしての正確さなどである。2つ目はこうしたデータを分析しやすいように電子化するし、コーディング（形態素解析）を行なう作業である。3つ目は量的、質的両面からの分析を行ない、これまでのデータと照らし合わせながらその特徴をつかむ。4つ目は上記で述べた作業仮説（「協和語」は一つの均一化された言語変種ではなく、両方の母語話者集団による2種類の中間言語である）を検証する。



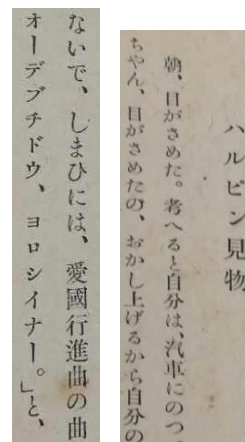
張守祥が2017年8月9日に首都大学院生 甲賀真広の旧満洲生活経験者の回想録資料の分析方法を指導する  
August 9, 2017 Zhang Shouxiang provides advice to Graduate Masahiro Koga about analysis of Manchurian language life data



東京外大名誉教授井上史雄と大阪大学名誉教授が討論者として出席した研究会後の記念写真2017年7月22日  
July 22, 2017 Fumio Inoue and Shinji Sanada attend Zhang Shouxiang's lecture at Manchurian studies symposium



張守祥が2017年7月22日講演する旧満洲研究会のポスター  
Poster from July 22, 2017 Manchuria studies symposium where Zhang Shouxiang delivered lecture



今回の来日中に新たに見つかった「協和語」使用文献  
Newly discovered literature using the Manchurian contact language